

高井戸東遺跡(東台地)の再検討

阿部 嵩士

はじめに

高井戸東遺跡(西台地)はⅢ層からⅩ層にかけて複数文化層が検出された重層遺跡である。特にⅨ層は3枚に文化層が分かれているが、環状ブロック群として同一文化層として捉えられる傾向もあり、Ⅸ層における文化層の見解は多様である。高井戸東遺跡が1980年代以前の発掘調査であることから、文化層定義に対する見解が大きく変化する前であったことも考慮すると、再検討の必要性が考えられる。

再検討に向け、情報の収集を行ったが、高井戸東遺跡(西台地)については元台帳から十分なデータを集積することができなかった。そのため本稿においては、地続きに隣接する東台地の検討を行うこととした。高井戸東遺跡(東台地)は報告書が刊行されているものの、石器の様相や出土状況は大まかにしか把握することができない現状であった。本稿において紹介するデータが、高井戸東遺跡におけるⅨ層文化の再検討に対する一助となれば幸いである。

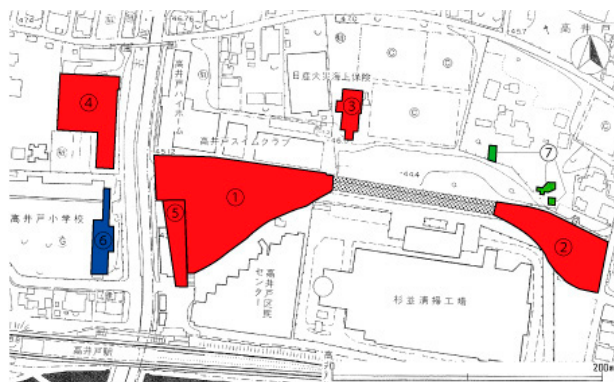
1. 高井戸東遺跡について

本稿において扱う高井戸東遺跡は、大きく3度(1976年、1981年、1996年)の発掘調査に分かれる。各調査区について第1図に示した。また出土した石器については第2図を作成した。第2図の作成にあたり、石器の実測図を取り扱った遺跡は「高井戸東遺跡(西台地)」、「高井戸東遺跡(近隣第一)」、「高井戸東遺跡(駐車場西)」、「高井戸東遺跡(近隣第二)」は旧石器時代の遺物が出土していないため、「高井戸東遺跡(東台地)」及び「高井戸東遺跡(近隣第三)」においては出土遺物の実測図が報告されていないため取り扱っていない。

1976年においては「高井戸東遺跡(西台地)」(第1図-①)、「高井戸東遺跡(東台地)」(第1図-②)、「高井戸東遺跡(近隣第一)」(第1図-③)、「高井戸東遺跡(近隣第二)」(第1図-④)、「高井戸東遺跡(駐車場西)」(第1図-⑤)の5か所で発掘調査が行われた。

続いて1981年においては、「高井戸東遺跡(近隣第三)」(第1図-⑥)で、1996年においては「高井戸東遺跡(近隣第四)」(第1図-⑦)で発掘調査が行われた。

特に「高井戸東遺跡(西台地)」では第Ⅲ層文化、第Ⅳ上層文化、第Ⅳ下層文化、第Ⅴ層文化、第Ⅸ上層文化、第Ⅸ中層文化、第Ⅸ下層文化、第Ⅹ層文化の8枚の文化層が、「高井戸東遺跡(駐車場西)」では第Ⅸ上層文化、第Ⅸ中層文化、第Ⅸ下層文化、第Ⅹ層文化の4枚の文化層が確認される重層遺跡であった。加えて両遺跡からは局部磨製石斧が出土しており、このことを小田静夫も当時高く評価している(小田1976,1977)。



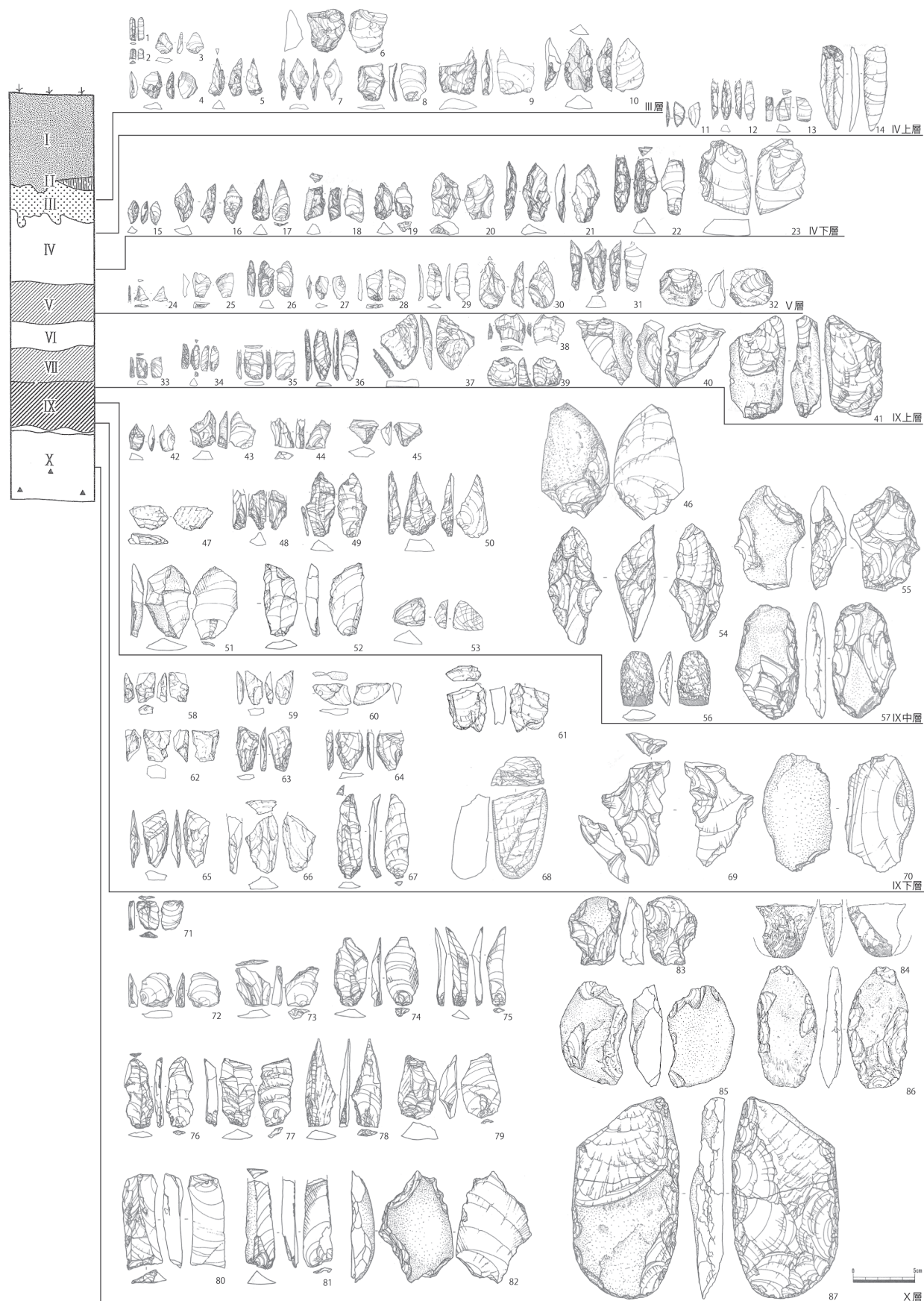
第1図 高井戸東遺跡 発掘調査区(①西台地、②東台地、③近隣第一、④近隣第二、⑤駐車場西、⑥近隣第三、⑦近隣第四)

2. 高井戸東遺跡における先行研究と課題

以上のように高井戸東遺跡の発掘調査過程と成果を踏まえた上で2章においてはこれまでの高井戸東遺跡の後期旧石器時代前半期における位置づけを整理する。

発掘当初1977年の報告書によるとAT以下の文化層は第Ⅹ層文化、第Ⅸ下層文化、第Ⅸ中層文化、第Ⅸ下層文化に分かれている。特徴的なⅨ層の3区分については主に石器集中のピークと礫群によって行われているものの、被熱が確認できる礫群はⅨ下層のみであり、またⅨ上・中層の礫群はNo.10礫群を除いてすべてイモ石礫群である。石器の形態としてはⅨ中・下層には縦長剥片製ナイフ形石器が素材形状をほとんど変化させずに製作するのに対して、横長剥片製ナイフ形石器においては折断技法を用いた調整加工が施される傾向が見受けられ、Ⅸ上層においては対照的であることが言及されている(小田ほか1977)。

その後佐藤宏之による編年の中で「高井戸東遺跡(西



1.2.11 ~ 23.26.30 ~ 45.48 ~ 51.53 ~ 57.63 ~ 65.67 ~ 84.87: 高井戸東遺跡 (西部台地), 47.52: 高井戸東 (近隣第一) 遺跡, 58 ~ 62.66.85.86: 高井戸東 (駐車場西) 遺跡, 3 ~ 10. 24.25.27 ~ 29: 高井戸東 (近隣第四) 遺跡

第2図 高井戸東遺跡の石器群の様相

部台地・駐車場西)」のIX上・中・下層はIX上層に位置付けられた。X層において佐藤は初期二側縁加工が見受けられるとし初期ナイフ形石器(第2図-74・75・76・77・78・79)と初期台形石器(第2図-72・73)を取り上げた。

IX層においてはナイフ形石器、剥片とされたものを一部、佐藤は台形石器として改めて取り上げた(第2図-45・58・59・60・62・63・64・65)。ナイフ形石器としては(第2図-33・34・36・50・67)を取り上げ、IX上とIX下の細分基準を「ナイフ形石器の形態(二側縁加工ナイフ形石器の形態の特徴と増加、小型二側縁加工ナイフ形石器の有無)、素材剥片の形状(より磯山型に近づく)、台形石器の減少傾向等」(佐藤1992)として高井戸東遺跡IX上・中・下層を一括してIX上層に比定している。本文中で佐藤は「IX層内を分離できず結果としてここに挿入した」(佐藤1992)と述べており、IX上・中・下層の内、IX上層石器群の様相を中心とした年代の比定が行われている(佐藤1992)。

小菅将夫・麻生敏隆らは2006年にIX・X層を5段階に細分し、石器群の様相を捉えようと試みた。5段階は、Xb層の時期をIa期、Xa層からIX層最下部の時期をIb期、IX層下部の時期をIc期、IX層中部から上部にかけてId期、IX層最上部をIe期に分かれる。小菅らによって編年の検討が行われる中で、高井戸東遺跡はX層出土の石器(第2図-71・75・86)が取り上げられ、素材が幅広であり形状が安定しない「高井戸東タイプ」(小菅1991)のナイフ形石器が出現するという特徴が挙げられるIb期に比定され、X層の中でも上層に比定されることが示された。

大塚宜明は「茂呂系」ナイフ形石器の起源を整理するうえで重層遺跡の例として高井戸東遺跡を取り上げている。分析の際には、第2図-34・36・37・50・51・63・65・67・71・72・75・78)を用い、X層からIX層にかけてのナイフ形石器の変遷を捉えた。高井戸東遺跡に加え草刈遺跡群、嘉留多遺跡を含めた分析の結果、基部加工ナイフ形石器はX層からIX層中部にまで見られること、一側縁加工・二側縁加工尖刃ナイフ形石器はIX層上部以降から見られること、平刃・曲刃・斜刃の二側縁加工ナイフ形石器は全時期に見受けられるという3点の特徴が理解された。また以上の特徴を帰属層位が明確な石器群に適応したところX層とIX層の区分として、二側縁加工尖刃ナイフ形石器の出現、IX層下部からIX層上部にかけての器面調整の登場が基準となることが示された(大塚2009)。大塚の編年研究において高井戸東遺跡IX層の分類としてはIX下層と上層における差異については言及さ

れているものの、IX中層とIX下層の区分については明らかにされておらずIX中・下層と一つに捉えられる傾向が確認できる。

高屋敷飛鳥は石刃技法の発展を捉えるうえでIX層内における技術の変化を述べる際に高井戸東遺跡を扱っている。高屋敷はIX中層・下層における石刃技法として、小口面型・周縁型どちらの石刃技法も存在すると述べており、石刃から生産された基部加工尖頭形石器の例として(第2図-67)を取り上げた。使用する石材としてはチャートや頁岩、凝灰岩が挙げられる。IX上層においては周縁型の石刃技法を使用した石刃生産が盛んになったことが中東遺跡等の接合資料から伺え、二側縁加工尖頭形石器も多数出土するようになると述べた。使用する石材の傾向としては黒曜石の利用が挙げられ、高井戸東遺跡から黒曜石製の二側縁加工ナイフ形石器である(第2図-36)が取り上げられた(高屋敷2020)。高屋敷の分析においても、大塚と同様に高井戸東遺跡のIX層はIX上層とIX中・下層の2分した捉え方がされている。

加えて石器の出土する位置という観点からは、2005年に岩宿文化資料館で開催された第40回企画展『環状ブロック群—3万年前の巨大集落を追う—』において、高井戸東遺跡IX上・中・下層一括で捉えた場合に、約40mにもなる環状ブロックを形成することが示唆されている(笠懸野岩宿文化資料館2005)。

ここまで高井戸東遺跡の石器群がどのような時期区分の要素として取り上げられたのかについて概観した。X層石器群については佐藤や小菅らの論考から見ると、帰属する層位はX層で問題ないようである。ではIX層についての論考を振り返ってみると、佐藤はIX上層一括で捉えることを示していることに対して、大塚や高屋敷はIX層をIX上層とIX中・下層と大きく2分して捉える傾向が見受けられ、IX層の石器群に対する研究者の見解は一致しておらず、多岐に渡る。

以上のような現状を振り返り、高井戸東遺跡IX層の位置づけを今後より明確にするためにも文化層設定の再検討が必要であると考えられる。

五十嵐彰は2000年に文化層の定義の変遷をまとめていく過程で、1980年代に文化層概念が大きく変化したと述べている。その要因として五十嵐は1987年に加藤晋平と岡崎里美らによる、遺跡において出土する遺物は土壌の凍結・融解によって上下に移動するという主張(加藤・岡崎1987)を挙げており、1970年代に発掘調査が行われた各地区(西台地・東台地・近隣第一・近隣第二・駐車場西)の文化層の再検討は十分に有効であると考えられる。

3. 高井戸東遺跡（東台地）の現状と再整理方法

今回高井戸東遺跡の文化層の再検討を目的とした資料の再整理にあたり、杉並区教育委員会より台帳を借用させていただいたところ、論考において高井戸東遺跡の遺物としてよく取り上げられる西台地についての情報は再検討に十分な情報を収集することができなかった。そのため、本稿においては高井戸東遺跡(東台地)における資料の再整理を行いIX層におけるデータを集積することとした。

3- 1 高井戸東遺跡（東台地）について

高井戸東遺跡(東台地)は1976年に発掘調査が行われた東京都杉並区に位置する遺跡である。第1図からも分かるように伏流による影響で形成されたと考えられるノッチを挟んで西台地と東台地は地続きに隣接している。西台地とは異なり試掘調査のトレンチを適宜拡張することで調査が終了しており、文化層は第IV下層文化、第VI層文化、第IX中層文化、第IX下層文化、第X層文化の計5枚の文化層が確認されている。

3- 2 高井戸東遺跡（東台地）の現在の報告状況

高井戸東遺跡(東台地)は、高井戸東遺跡(西台地・東台地)の両台地の予備調査が行われた際に刊行された『高井戸東遺跡 Preliminary Report』(小田・重住編1976)にその内容が報告されている。

報告内容としては、各文化層における出土点数と主要な器種に加えて「石器の平面分布図(遺物番号なし)」、「出土石器の白黒写真」が報告されている。

3- 3 高井戸東遺跡（東台地）における問題点

本節においては上述した高井戸東遺跡(東台地)の報告の現状を踏まえ、2点の問題点を挙げたい。

①「石器の平面分布図」における問題

報告書に掲載されている「石器の平面分布図」には石器の位置を示す点に対応する遺物番号が示されておらず、石器の位置関係を把握することができない。

②掲載されている石器の情報

1976年の報告書では、西台地については出土した局部磨製石斧や石刃が実測図として掲載されている。対して、東台地において出土した石器については実測図の掲載はなく、報告書巻末の白黒写真で確認することができるのみであり、石器の剥離や使用された石器石材を確認することも困難である。

以上のような2点の問題を抱えているため、現在「高井戸東遺跡(東台地)」の様相を把握することが非常に困

難である。そこで次節のような再検討を行うこととした。

3- 4 再検討方法

本節では、再検討に用いた資料を挙げ実際に行った作業を記述する。

まず、対象資料は上述した「高井戸東遺跡IX層文化層の再検討の必要性」という観点から、高井戸東遺跡(東台地)第IX中層文化、第IX下層文化の2文化層とする。

石器の平面分布の情報については、杉並区教育委員会より借用した「高井戸東遺跡東部台地平面図」(杉並区教育委員会蔵)、「高井戸東遺跡東部台地遺物地点実測図」(杉並区教育委員会蔵)を参照し、報告書に掲載されている「石器の平面分布図」と照らし合わせ各遺物の出土地点及び各遺物の注記番号の確認を行った。

また杉並区郷土博物館に収蔵されている「高井戸東遺跡(東部台地)出土遺物」(杉並区教育委員会蔵)の見学、及び借用をさせていただき石器の観察、実測図の作成、写真撮影、3Dデータの作成を行った。

以上の作業によって得られたデータを4章で紹介する。

4. 東台地第IX中・下層文化における出土状況と出土石器

本章においては、台帳の再確認・石器の観察などを通して集積したデータを文化層、ユニットごとに公開する。桃色の遺物番号で示している石器は、今回実物を観察することができなかったものである。赤い点線で囲んでいるものは台帳より位置を特定したものである。報告書に掲載された遺物地点はコンピューターによる作成が行われているのに対し、借用した台帳は手作業のため、特定の為に両図を用いた際に位置のズレが生じた。そのためある程度の範囲をもって遺物の出土位置を特定している。また遺物番号が桃色で示されているものは今回実物の観察を行うことができなかった石器である。

第IX中層文化 ユニット1（第3図）

○出土状況と石材構成及び器種組成

このユニットにおいては石器が計24点出土している。出土した24点の石器の位置と遺物番号については全て確認することができ、その内遺物を観察することができたのが21点である。器種組成は、ナイフ形石器が1点(A31-20)、二次加工のある剥片2点(A31-16, A31-18)、敲石2点(B31-35、B31-41)、台石1点

(A31-25)、その他剥片類によって構成される。石材構成としては黒色頁岩14点、ホルンフェルス5点、チャート2点が確認される。報告書内ではA31-16はスクレイパーとして報告されているが実見したところ、スクレイパーエッジのような加工は見当たらなかったため、剥片類に分類している。

○出土石器

A31-20は黒色頁岩製のナイフ形石器である。頁岩単品。不整系な縦長剥片を縦位に用いており、先端部は石器の主軸から外れている。左側縁の上部から下部にかけて急斜度の加工が施され、弧状に成形される。打面と石器の基部は一致しており、打面は残地されている。長さが2.7cm、幅が1.3cmである。(第7図)

A31-18はホルンフェルス製の二次加工のある剥片である。ホルンフェルス単品。横長剥片を横位に用いて、左側縁に平坦な加工を施している。表面は節理面によって構成され、打面は原礫面である。(第7図)

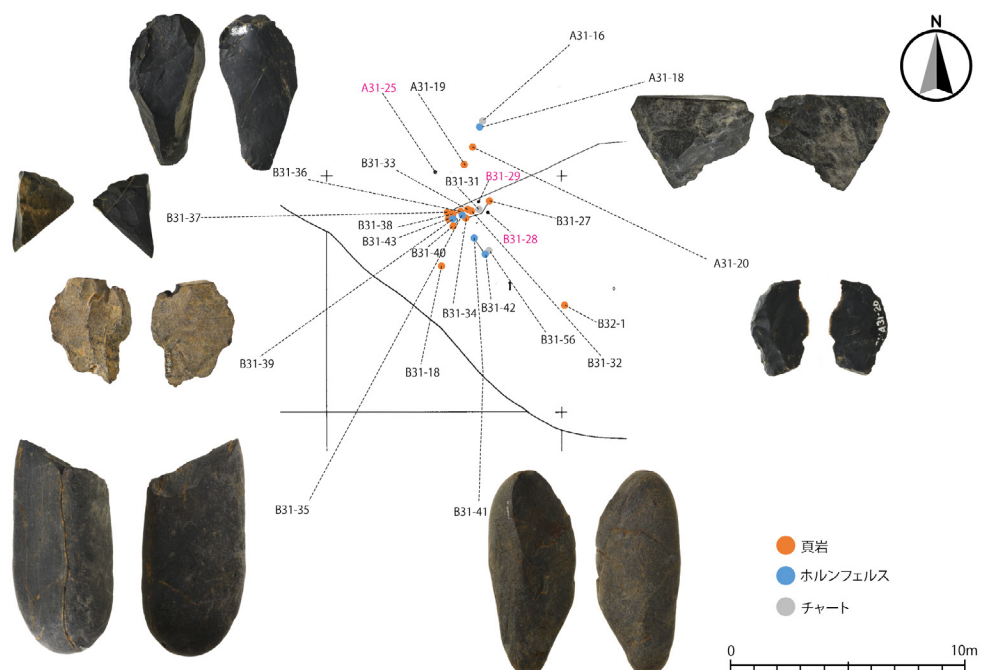
B31-36は黒色頁岩製の剥片である。頁岩1。縦長剥片であり、主要剥離面と同一の加撃方向から複数回剥離が行われていることが、背稜構成から観察される。打面は原礫面をそのまま有している。(第7図)

B31-37は黒色頁岩製の剥片である。頁岩1。ユニット2から出土したA32-239の左側縁から折れた石器であり、A32-240も加え3点でブロック間接合をする。背面はA32-239と接合した状態であってもすべて原礫面である。

B31-39はホルンフェルス製の剥片である。ホルンフェルス単品。幅広の縦長剥片であり、下端部末端においてはステップ・フレーキングを起こしている。背稜構成からは主要剥離面と同一の加撃方向から剥離されたと思われる剥離面によって構成される。右側縁には原礫面が残る。(第7図)

B31-35はホルンフェルス製の敲石である。ホルンフェルス単品。下端部や側面に敲打痕が見受けられ、上端部から下端部にまで入るヒビは敲打による影響と考えられる。

B31-41はホルンフェルス製の敲石である。ホルンフェルス1。下端部、上端部どちらにも敲打痕が見受けられる。B31-42は敲く際に割れたものであると考えられ、接合関係にある。B31-35よりも軽く、やや小型である。



第3図 第IX中層文化 ユニット

第IX中層文化 ユニット2 (第4図)

○出土状況と石材構成及び器種組成

A32-255は出土位置を特定した石器である。

このユニットにおいては出土位置を特定したものを含め計37点が出土している。出土した石器の位置と遺物番号については37点すべて確認することができ、その内遺物を観察することができたのは33点である。器種組成は、二次加工のある剥片が2点(A32-236、A32-258)、微細剥離を有する剥片が1点(A32-227)、両極剥離痕を有する石器が1点(A32-245)、石核が3点(A32-228、A32-243、A32-255)、その他剥片類によって構成される。石材構成として、チャートが14点、黒色頁岩が13点、黒曜石が6点確認される。

○出土石器

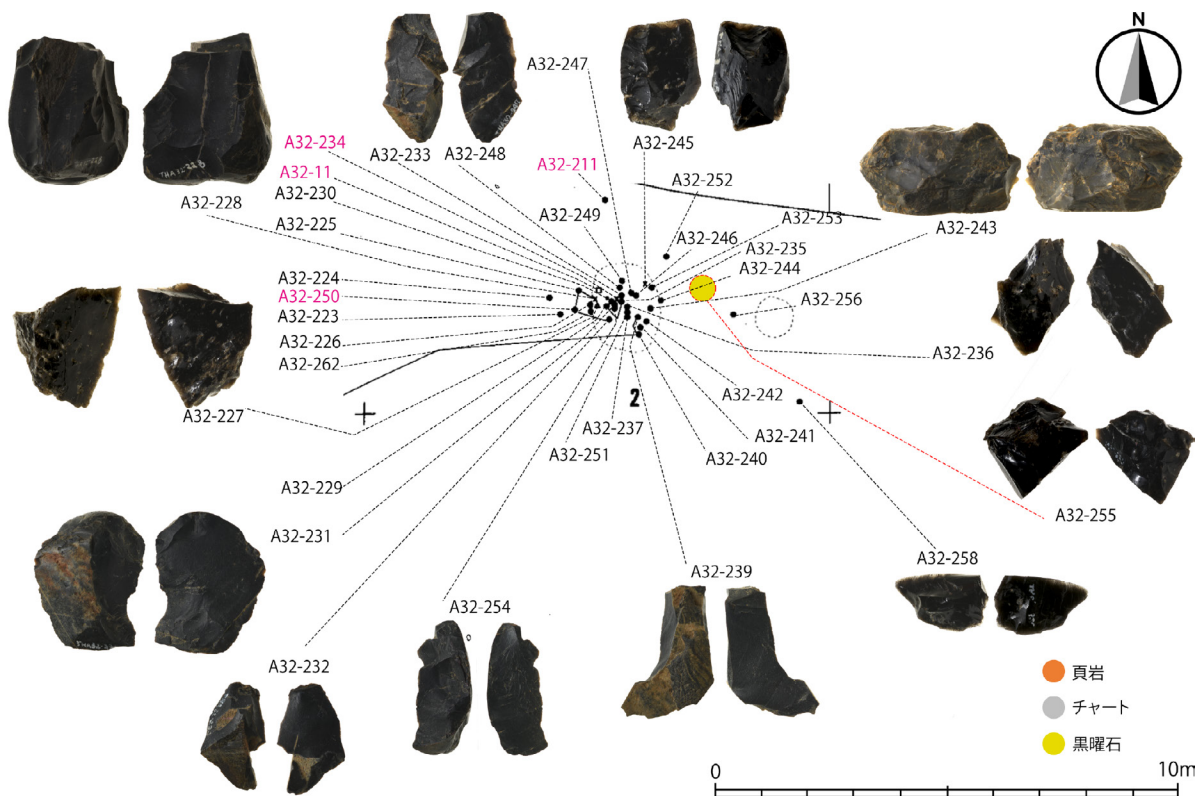
A32-227は黒曜石製の微細剥離を有する剥片である。黒曜石1。石器の上半部及び下部が欠損しているため素材剥片の形状は不明である。上半部の折れによって打面が失われている。右側縁、左側縁ともに微細剥離が見受けられる。表面中央の稜線からは石核調整と思われる調整加工が見受けられる。(第7図)

A32-228は黒色頁岩製の石核である。頁岩1。打面転移を繰り返す石核であり、A32-224やA32-232と接合関係にある。裏面、下面は原礫面のままであり、上面、表面、右側面、左側面いずれかを作業面として剥片剥離が行われている。

A32-231は黒色頁岩製の剥片である。頁岩1。縦長志向の幅広剥片であり、表面の半分以上が原礫面であり、打面も原礫面によって構成されている。獲得した原石から剥片剥離を行う初期段階に剥離されたことが想定される。(第7図)

A32-232は黒色頁岩製の剥片である。頁岩1。縦長剥片であり、A32-228、A32-225との接合関係が確認されている石器である。A32-228は打面転移を繰り返す石核であり、A32-232は偶発的に作出された縦長剥片であると捉えられる。(第7図)

A32-236は黒曜石製の二次加工のある剥片である。黒曜石1。横長剥片を縦位に用いて右側縁の上部から中部に粗い調整を加えた後、急斜度の加工を、左側縁の下部に急斜度の加工を施している。上半部及び下部の一部が



第4図 第IX中層文化 ユニット

第IX中層文化 ユニット3 (第5図)

○出土状況と石材構成及び器種組成

このユニットにおいてはB33-23を、台帳を用いて出土位置を特定した。

ユニットにおける石器の出土総数は出土位置を特定したものを合わせ計24点である。石器の出土位置と注記番号は24点すべて確認することができ、20点の遺物を観察することができた。器種組成は石核が7点(A33-15、A33-21、B33-7、B33-16、B33-17、B33-18、B33-20)、その他剥片類によって構成される。

使用石材はチャートが16点、黒色頁岩、凝灰岩、ホルンフェルス、砂岩がそれぞれ1点ずつ確認される。

○出土石器

A33-15はチャート製の、石核である。チャート3。A33-17、B33-1と接合関係にあり、ほぼ円礫の状態にまで復元される。A33-17、B33-1は同一の加撃方向から連続的に剥離されているが、その打面部は90度異なる加撃方向から剥離された剥離面である。この剥離面はB33-1の背稜構成などから、原礫面を除去し打面部を作るための剥離面であると考えられる。(第10図)

A33-17はチャート製の、縦長剥片である。A33-15、B33-1と接合しほぼ円礫の状態にまで復元される。B33-1、A33-17の順番で連続的に剥離されている。全体的に左に湾曲した縦長剥片である。(第8図)

A33-21はチャート製の石核である。チャート単品であり、周辺の石器との接合関係はない。背稜構成からは、左右縁辺を打面として剥片剥離が行われていたことが伺える。裏面の左側においても剥離面が観察されるため、180度の打面転移を行う石核であることが考えられる。裏面は左側の剥離面を除き原礫面でおおわれており、亜鉛礫であったことが想定される。(第8図)

B33-1はチャート製の剥片である。チャート3。A33-15、A33-17と接合関係にある。縦長指向の幅広剥片であり、背稜構成からは主要剥離面と同一の加撃方向から剥離された剥離面によって構成されており、剥離の新旧関係からA33-15の原礫面が除去され打面部が作られた後、単設打面による剥片剥離が行われたと考えられる。(第8図)

B33-7はホルンフェルス製の石核である。ホルンフェルス単品。第IX中層文化中で最大の石核であり、ユニッ

ト内、ブロック間での接合は見受けられない。複数の剥離面が観察され、幅広剥片を作出していたことが見受けられる。(第11図)

B33-14はチャート製の剥片である。チャート単品。縦長剥片であり、背稜構成からは主要剥離面と同一の加撃方向から剥離された剥離面によって構成される。左側縁下部、下端部には原礫面が残る。(第8図)

B33-28は凝灰岩製の剥片である。凝灰岩単品。横長剥片であり、背稜は先行する剥離面を大きく取り込んでいる。打面は非常に小さく、右側縁下部に原礫面を有する。剥離の末端はステップ・フレーキングを起こしている。(第8図)

第IX中層文化 ユニット4 (第5図)

○出土状況と石材構成及び器種組成

ユニットにおける石器の出土総数は3点である。石器の出土位置と注記番号は3点すべて確認することができ、2点の遺物を観察することができた。器種組成は微細剥離のある剥片1点(B34-98)、その他剥片類である。使用石材はチャート、黒色頁岩が1点ずつである。

○出土石器(第8図)

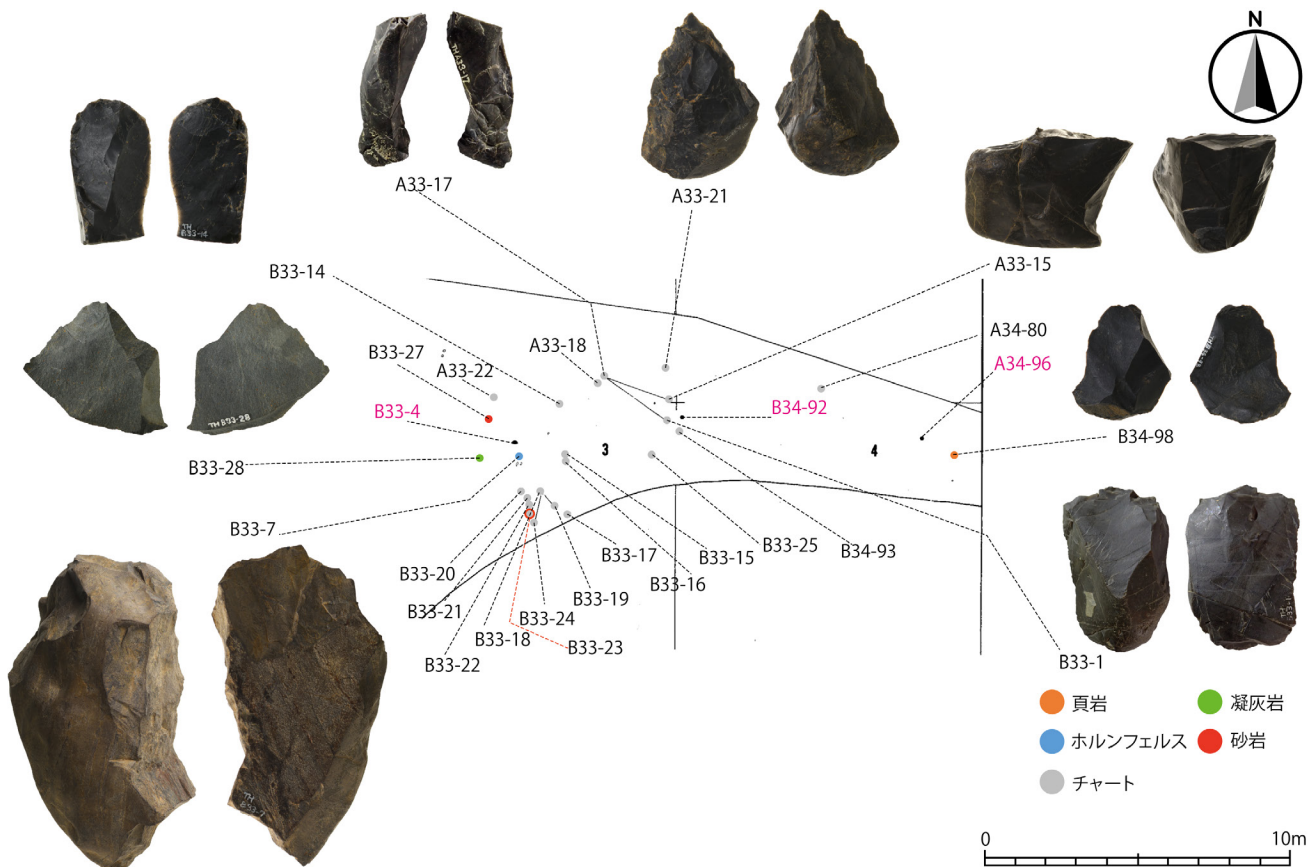
B34-98は黒色頁岩製の微細剥離のある剥片である。頁岩単品。報告書内ではスクレイパーとして報告されているが、刃部と判断されたと思われる下端部には連続した急斜度の剥離はなく、微細な剥離が何か所か見受けられるのみであったため、微細剥離のある剥片としている。

第IX下層文化 ユニット1

○出土状況と石材構成及び器種組成

このユニットにおける石器の出土総数は22点である。石器の出土位置と注記番号は22点すべて確認することができ、20点の遺物を観察することができた。器種組成としては、スクレイパー1点(A32-261)、微細剥離のある剥片1点(A32-219)、礫器1点(A32-218)、石核2点(A32-269、B33-37)、敲石1点(B32-16)、台石1点(B32-7)、その他剥片類によって構成される。

使用石材はホルンフェルスが8点、チャートが7点、安山岩が2点、黒色頁岩2点、砂岩1点である。



第5図 第IX中層文化 ユニット

○出土石器

A32-218はホルンフェルス製の礫器である。Ho単品。表面においては上部に2枚の大きな剥離面を有し、さらに上端部に複数の細かい剥離が施されている。裏面においては表面とインバースとなる剥離面が1枚確認される。裏面においても表面と同様に下端部に細かい剥離が複数施されている。(第9図)

A32-219はチャート製の微細剥離のある剥片である。Ch単品。横長剥片であり、右側縁は折れによって欠損している。左側縁においては微細剥離が見受けられる。背稜構成からは主要剥離面と90度あるいは180度異なる加撃方向からの剥離が見受けられ、打面転移を繰り返す石核から剥離されたことが伺える。(第9図)

A32-261は黒色頁岩製のスクレイパーである。Sh 1。横長剥片を素材とし、打面側に急斜度の加工を施すことで刃部を作成している。背稜構成からは主要剥離面と90度あるいは180度異なる加撃方向からの剥離が観察されることから、打面転移を繰り返す石核から剥離された剥片を素材としていたことが想定される。(第9図)

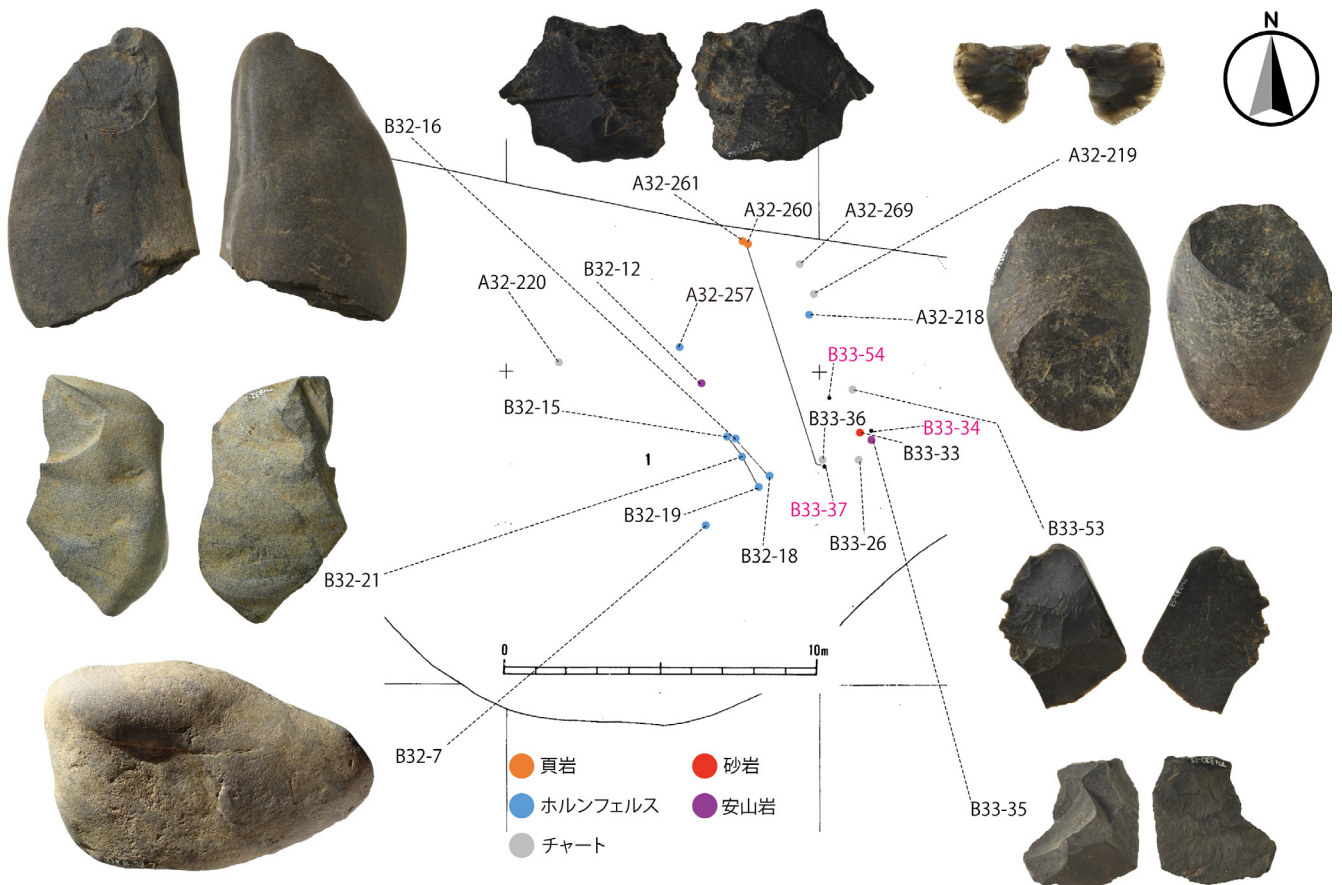
B32-7はホルンフェルス製の台石である。Ho単品。

B32-16はホルンフェルス製の大型の敲石である。Ho1。上端部には敲打痕が見受けられ、表面上部の剥離は敲打によるものであると考えられる。またB32-18とも接合関係にあり、こちらも敲打による破損であると考えられる。

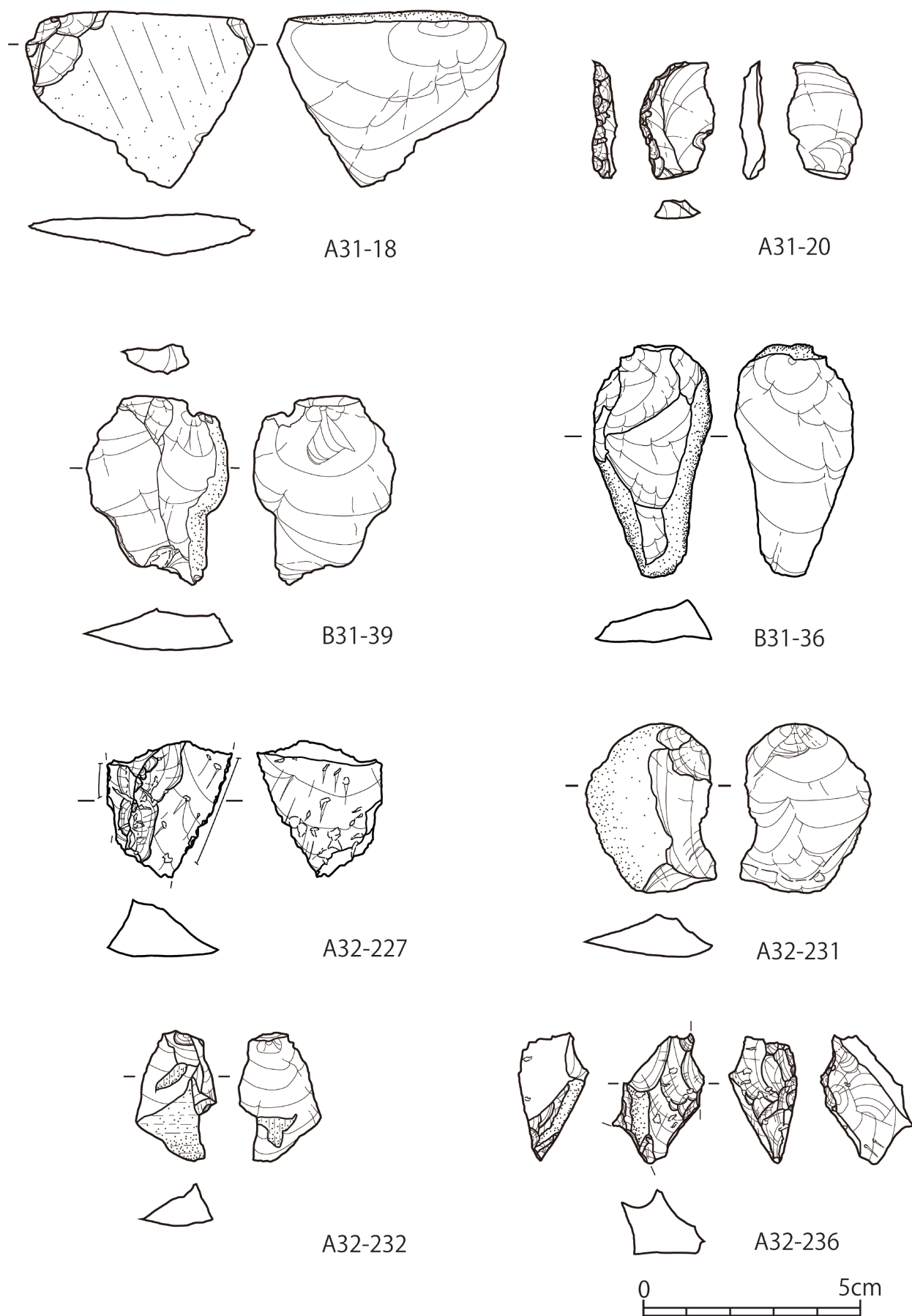
B32-21はホルンフェルス製の剥片である。Ho 2。B32-15、B32-19と接合関係にあるが、折れによる破損である。表面のほとんどが原礫面に追われ、上部に主要剥離面と同一の加撃方向から剥離された剥離面を有する。打面には調整は施されず原礫面のままである。(第9図)

B33-35は安山岩製の剥片である。An 1。幅広の剥片であり、下部に原礫面を有する。背稜構成からは主要剥離面と同一の加撃方向から剥離された剥離面によって構成されている。(第9図)

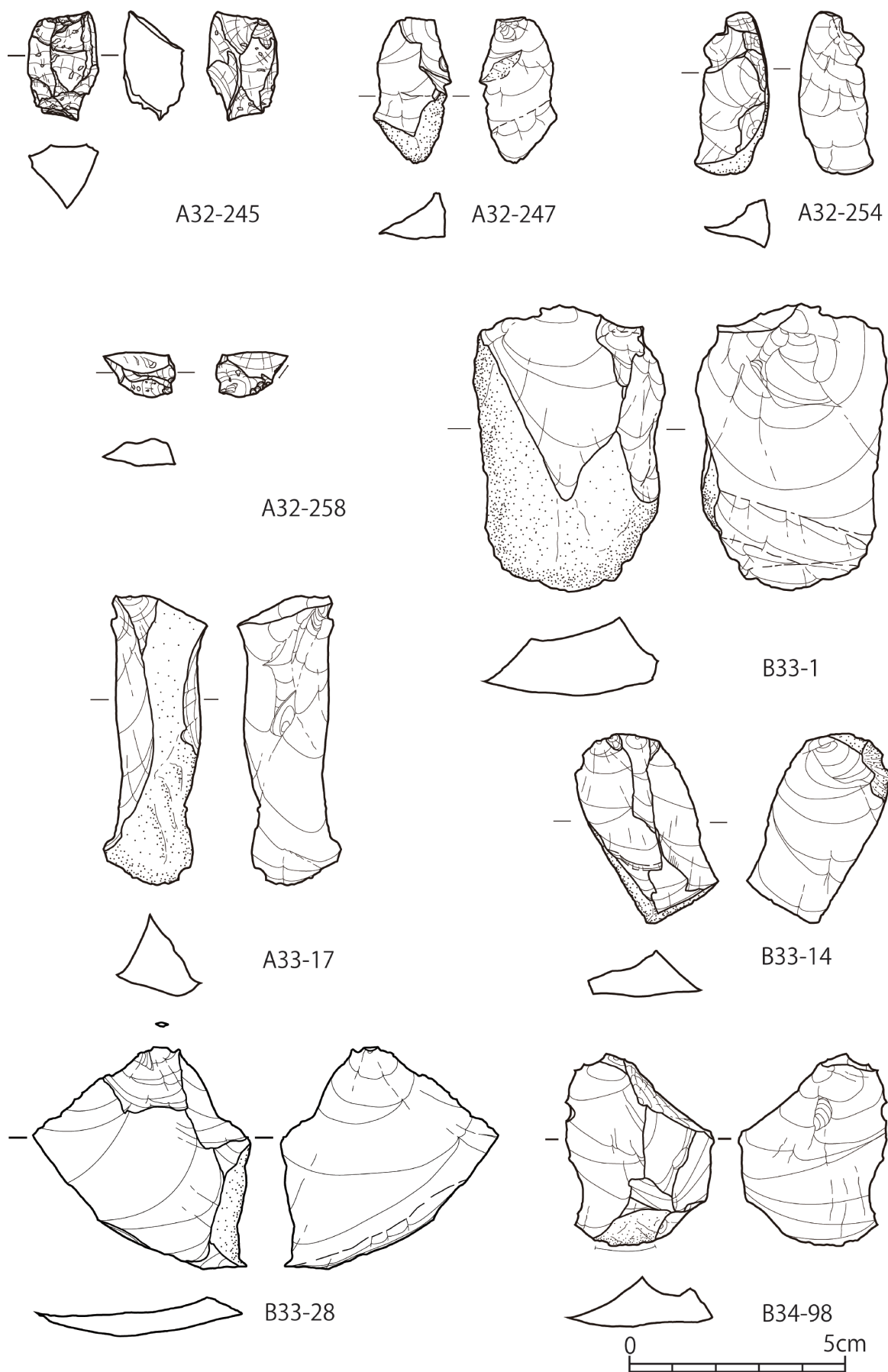
B33-53は珪質頁岩製の剥片である。Ksh単品。幅広の剥片であり、左側縁下部が折れによって欠損している。表面において、右側縁は原礫面が残地され、先行する剥離面を大きく取り込む。背稜構成からは主要剥離面と同一方向から剥離された剥離面のほか90度加撃方向の異なる剥離面も見受けられ、打面転移を繰り返す石核から剥離されたことが想定される。打面には調整は施されず、原礫面が残地される。(第9図)



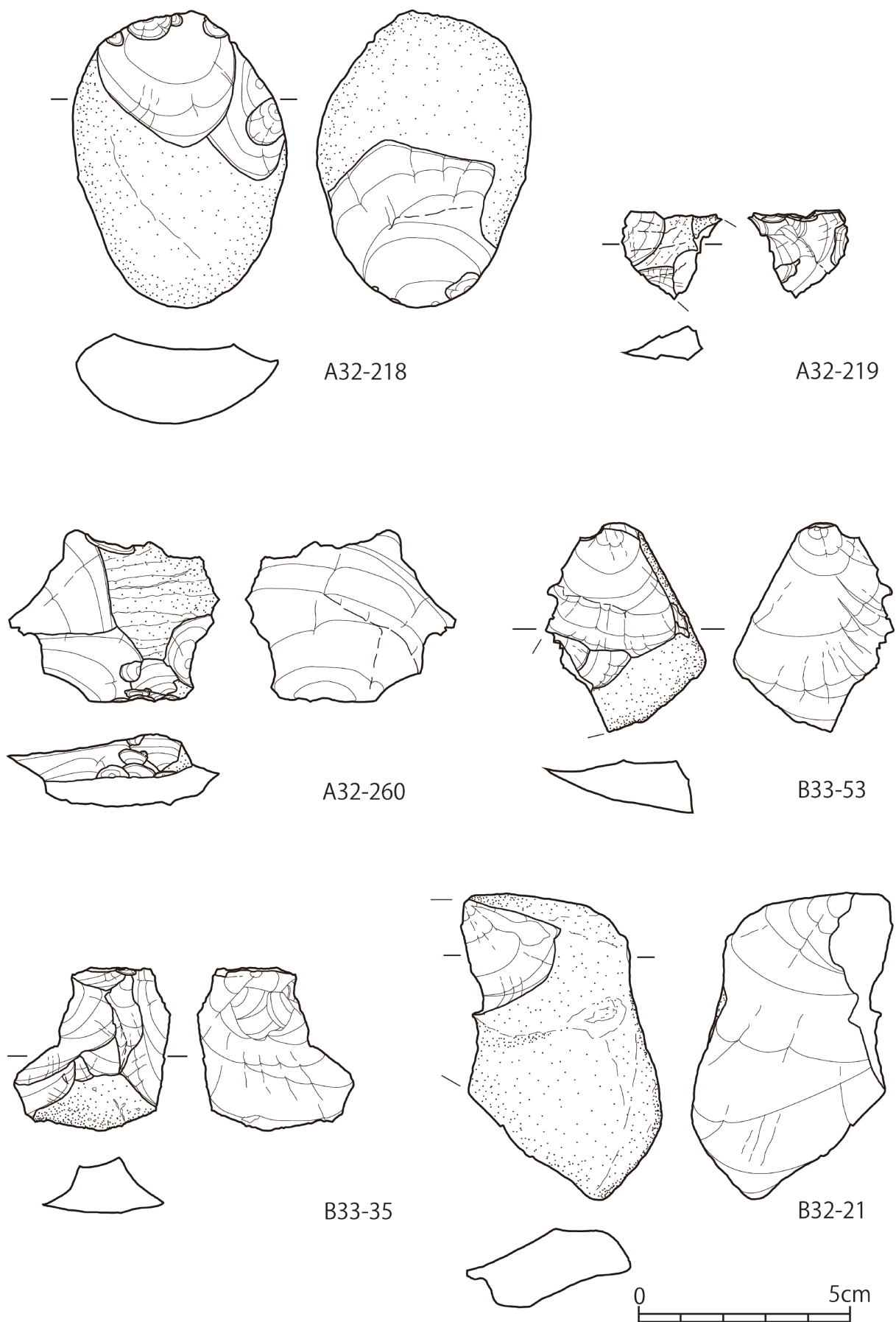
第6図 第IX下層文化 ユニット



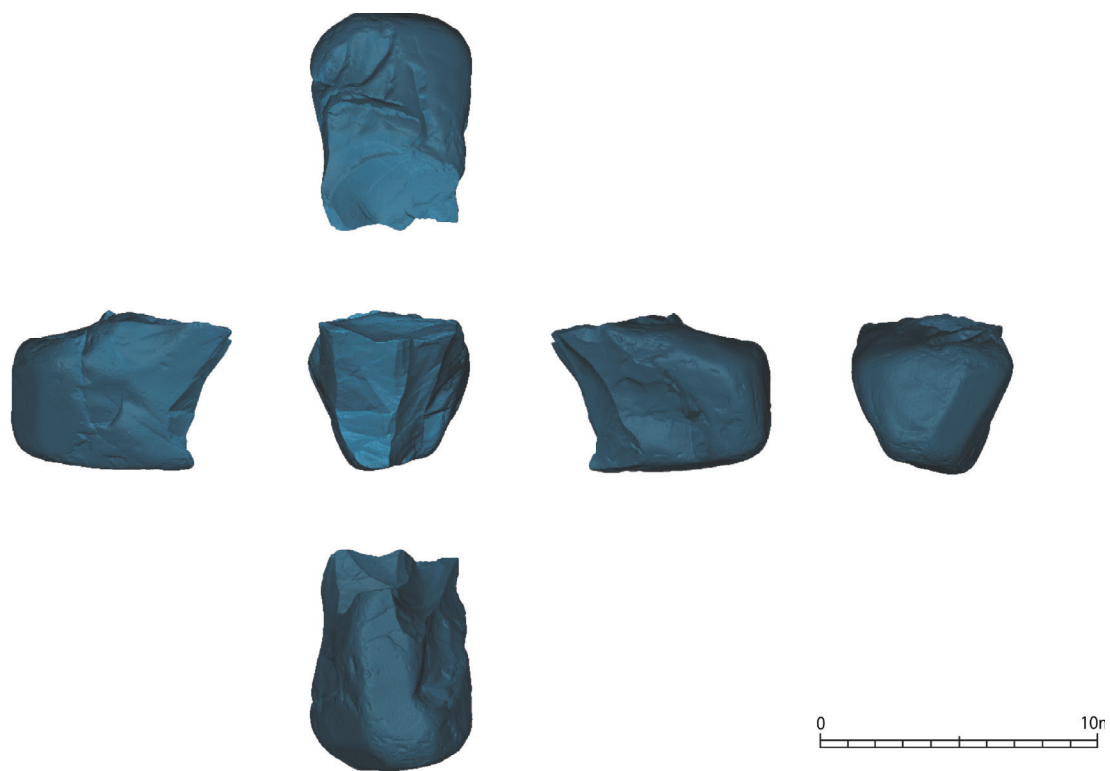
第7図 実測図版1



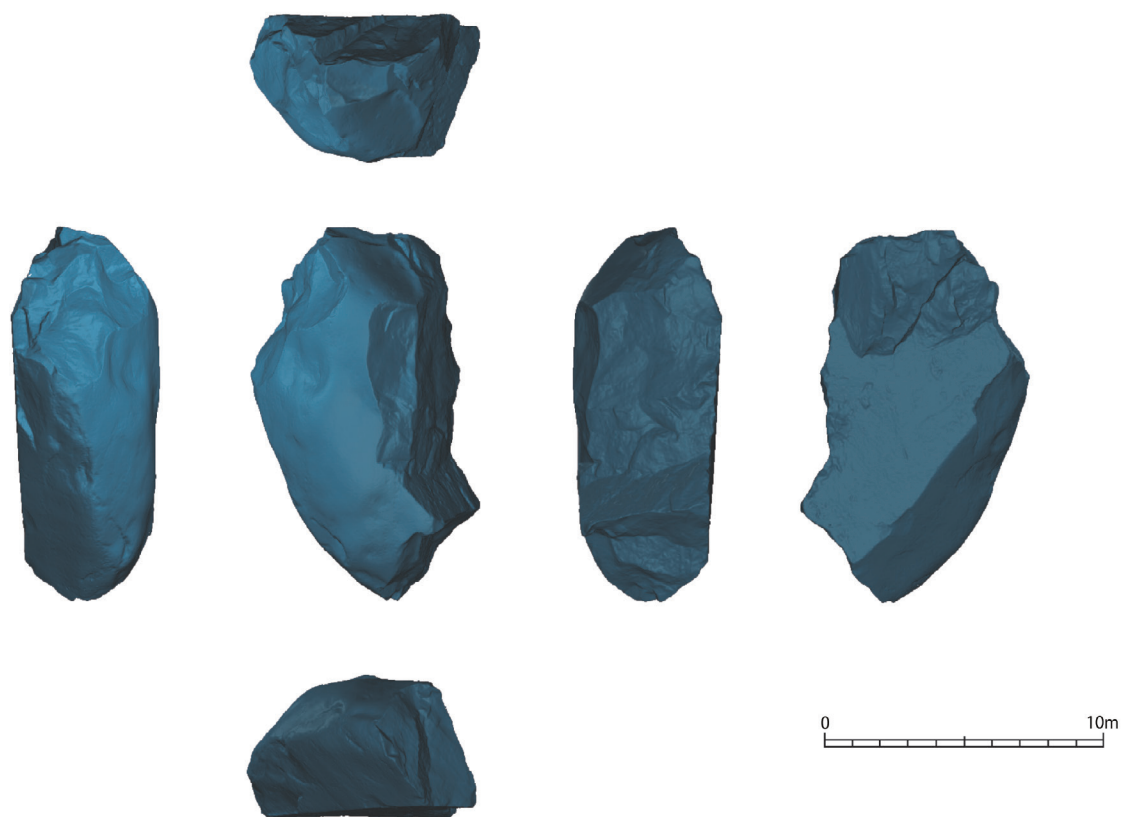
第8図 実測図図版2



第 9 図 実測図版 3



第 10 図 A33-15 3D モデル



第 11 図 B33-1 3D モデル

徴といえる。ユニット2と共通する石材としてはチャート1が2点確認されるが、2点とも非常に小さな剥片であり、ユニット内で占める重量の割合も小さい。石器分布についてもユニット1、2と異なる様相を示しており、非常に広がりを持ったユニットであることが図5から見て取れる。

ユニット4は構成する石器が3点であり、内2点を観察したところどちらも単品搬入品であることが確認された。それぞれの石器は距離を持って分布している。

以上のような特徴をまとめると、ユニット1、2は共通点が多く、接合関係も有することから同時期にそれぞれ同一の機能をもったユニットとして形成された可能性がある。ユニット3、4については、ユニット3が石器分布に広がりを持ち母岩数が豊富にあること、ユニット4の石器間の距離が離れ、単品搬入品によって構成されていることから、持ち込まれた石器によって構成された一つのユニットとして捉えることも可能である。

ユニット1、2とユニット3、4については石器分布、石材構成等から共通点は見いだせず、今後垂直分布による検討などが必要であろう。

第IX下文化層ユニット1については、再整理から石器の分布はまばらであり、母岩数が豊富であることが判明した。接合関係は2例、報告書の図面から判断されるが今回の石器の観察からは1例のみしか実見することができなかった。ユニットの傾向としてはユニット3と同様の傾向を示しており、積極的な剥片剥離は行われず持ち込まれた石器で構成されたユニットであると考えられる。

次に第IX中層文化と第IX下層文化の分類の再検討について。今回は垂直分布については復元することはできなかったため、平面分布、接合関係及び母岩別分類による使用された石材の傾向を中心に検討する。第IX中層文化内で、ユニット間での接合関係が認められるのはユニット1、2間であり、頁岩1、チャート1が主体である。ユニット3、4では頁岩1は見受けられず、チャート1は出土しているものの非常に少ないためユニット1、2と同時期であるのかは不明である。しかし、ユニット3、4はユニット1、2とは異なった平面分布の様相を示しており、平面分布が示す機能による石材の使い分けが行われている可能性もあるため、一概にユニット1、2とユニット3、4が同時期ではないと判断することはできない。

第IX中層文化と第IX下層文化で比較した場合には、明瞭な石材構成に差があることが確認され、両文化層で共通した母岩はないことから、「高井戸東遺跡(東台地

)」においてはIX層において2文化層確認されることが理解された。

今回は「高井戸東遺跡(東台地)」において、石器の位置関係・石材におけるデータを集成し、文化層間における差異を見出した。今回はデータを十分に集めることができず、「高井戸東遺跡(西台地)」を再整理することはできなかったが、西台地においても石器の位置が不明であること、石材の母岩別分類は行われていないことが問題として挙げられる。今後資料の充実を図ることができた際には、西台地を対象とした再検討を行いたい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、暖かいご指導を賜った長崎潤先生に感謝申し上げます。本研究に使用させていただいた高井戸東遺跡の台帳(杉並区教育委員会蔵)の借用、「高井戸東遺跡(東部台地)出土資料」(杉並区教育委員会蔵)の資料見学において、杉並区教育委員会の櫻井佳奈子氏、橋本脩平氏に大変お世話になりました。文末ですが記して感謝申し上げます。

参考文献

- 五十嵐彰 2000 「「文化層」概念の検討－旧石器資料報告の現状(Ⅱ)」『旧石器考古学』60 pp.43-56
- 大塚宜明 2009 「「茂呂系」ナイフ形石器の出現をめぐる研究の現状と課題」『石器文化研究』15 pp.7-16
- 小田静夫 1976 「日本最古の磨製石斧」『どるめん』11 pp.96-109
- 小田静夫 1977 「先土器時代の東京」『どるめん』15 pp.32-49
- 小田静夫 1979 「広域火山灰と先土器時代遺跡の編年－特にATについて－」『史観』11pp.1-16
- 小田静夫 1980 「武蔵野台地に於ける先土器文化」『神奈川考古』8 pp.11-27
- 小田静夫 1981 「武蔵野の初期開拓－武蔵野の旧石器時代－」『武蔵野』59-2 pp.55-63
- 小田静夫・重住豊編 1976 『高井戸東遺跡 Preliminary Report』高井戸東遺跡調査会
- 小田静夫・伊藤富治夫・C.T.Kally・重住豊編 1977 『高井戸東遺跡』高井戸東遺跡調査会
- 笠懸野岩宿文化資料館 2005 『第40回企画展 環状ブロック群－3万年前の巨大集落を追う－』
- 加藤晋平・岡崎里美 1987 「考古学の立場からみた土壌学」『土壌学と考古学』pp.45-70 博友社

- 小菅将夫 1991 「ナイフ形石器の変遷」『石器文化研究』3 pp.75-84
- 小菅将夫・麻生敏隆 2006 「関東地方を中心とした岩宿時代Ⅰ期の予察的細分編年」『岩宿時代はどこまで遡れるかー立川ローム層最下部の石器群ー 予稿集』岩宿フォーラム/シンポジウム 2006 pp.76-83 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 坂入民子・伊藤富治夫・織笠昭編 1977 「高井戸東(駐車場西)遺跡」高井戸東(駐車場西)遺跡調査会
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3 pp.1-37
- 佐藤宏之 1991 「日本列島内の様相と対比ー2 極構造論の展開ー」『石器文化研究』3 pp.129-140
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 重住豊・菅田実編 1977 『高井戸東(近隣第一)遺跡』高井戸東(近隣第一)遺跡調査会
- 志村有司・杉本正文・本橋恭子・渡辺宏之 1981 『高井戸東(近隣第三)遺跡』高井戸小学校遺跡調査会
- 高屋敷飛鳥 2020 「石刃技法の出現ー南関東地方～愛鷹山麗を中心にー」『愛鷹山麗の旧石器文化』敬文舎 pp.225-254
- 長島智・林徹 1998 『高井戸東(近隣第四)遺跡』高井戸東(近隣第四)遺跡調査団
- 菅田実・重住豊・田中純男編 1977 『高井戸東(近隣第二)遺跡』高井戸東(近隣第二)遺跡調査会

図版出典

- 第1図 長島ほか 1998 第1図を加筆
- 第2図 小田・伊藤・Keally・重住編 1977、重住・菅田編 1977、坂入・伊藤・織笠編1977、長島ほか 1998 を基に一部加筆、編集し筆者作成
- 第3図 小田・重住編 1976 東台地出土の遺構・遺物分布図を一部加筆、編集し筆者作成
- 第4図 小田・重住編 1976 東台地出土の遺構・遺物分布図を一部加筆、編集し筆者作成
- 第5図 小田・重住編 1976 東台地出土の遺構・遺物分布図を一部加筆、編集し筆者作成
- 第6図 小田・重住編 1976 東台地出土の遺構・遺物分布図を一部加筆、編集し筆者作成
- 第7図 筆者作成
- 第8図 筆者作成
- 第9図 筆者作成
- 第10図 筆者作成
- 第11図 筆者作成
- 表1 筆者作成